

ドルトによる子どもの新しい教育 (I)

山中 哲夫 (愛知教育大学外国語教育講座)

(2004年9月27日受理)

La nouvelle éducation de l'enfant selon Dolto (I)

Tetsuo YAMANAKA (Department of Foreign Language, Aichi University of Education)

要約 親たちの不安：子どもは親を批判することによって親を試している。不公平が公平。子どもから嫌われないために子どもの機嫌を取ろうとしてはいけない。／良い子は悪い子：良い子は親のために自分の本来のリビドーを抑圧している。近親相姦的關係に陥りやすい。精神的に健康になるためには、親に対して愛情と緇い混ぜになった敵意を示す必要がある。成長するためには「よそよそしさ」が必要。／自律性と学業の遅れ：勉強がうまくいかないのは、他のことがうまくいっていない証拠。躰とは子どもに自律性を獲得させること。自律性獲得には親子間の完全な信頼關係が不可欠。／第三の人物：子どもの健全な心の成長には二番目の親の存在が重要。母子家庭の場合、子どもに真実を語ることもっとも重要。

Keywords：愛憎、自律性、第三の人物

はじめに

アメリカの自我心理学が主流である日本では、当然育児についてもアメリカ流の教育法が多く取り入れられていると思われるが、フランスでは幼児教育法と言えば、ドルトの右に出る者はいないだろう。(1) 30年にわたるラジオの教育相談で多くの聴取者の悩みに答え、その名声は広くヨーロッパ全土に知れ渡っている。専門は児童の精神病治療だが、育児に悩む多くの親たち、また学童の問題に心痛めている多くの教師たちに、彼女のアドヴァイスは得難い福音となっている。日本ではまだ受け入れられにくい彼女の理論と実践を、より理解し易い形でここに数回に分けて紹介したいと思う。フロイトの精神分析を基盤として、さらにラカンにより理論的な裏付けを得た彼女の見事な精神病治療の症例もまた、紹介すべき意味を十分に持っているが、これは別の機会に譲る。

親たちの不安

親は常に不安な思いで子どもたちに接している。不安であるがゆえに必要以上に騒ぎ立てる傾向にある。それが解決をさらに困難なものにしている。また子どもの教育に関して何かコツのようなものを得たがっている。即効性のある解決方法を求めたがっている。そのことがまた事態を悪化させてもいる。子どもの問題、特に対人關係は子どもの成長とともに深刻になってゆくと親たちは考える。しかしドルトははっきり言っている。対人關係の問題は25歳までしか続かない、と。もちろんこれは病理的でない場合の話であるが、対人

關係の問題に突き当たらずに子どもを育てることは不可能である。対人關係は必ず症状として表われる。身体症状に表われる場合は、発熱、下痢、行動として表われる場合は、不登校(学校に行かないのではなく、行けない—子どもにとって「学校」がすべてであるので、これは大変な苦しみである)、ひきこもりなどである。これらは精神医学的に言えば、子どもの側から見ると、エネルギーを備給している状態である。これからの人生を生きるためにエネルギーを補給している状態である。苦しんでいる緊張状態を自ら緩和しているわけで(家庭内暴力もその一種)、親が心配しなければさらにうまく緩和できるものである。

子どもは常に嫉妬する。両親に対する嫉妬、兄弟に対する嫉妬、友だちに対する嫉妬など。家庭内で子どもの嫉妬を避けるために同じように応えようとしがちだが、これはやめるべきだとドルトは言っている。子どもはそれぞれ問題解決の方法が異なる。不公平は当然のこと、不公平が公平なことだと子どもに明言すべきだと勧めている。当初子どもたちは不平不満をもらすが、しかし自然に要求は撤回されてゆく。子どもというものは大人の弱みを大変よく知っていて、その急所を突く名人である。不公平だという不満をおつけることによって、大人の自信を揺さぶろうとしているのである。これをきっぱりとはねつけることによって、子どもは揺さぶりに失敗する。そのことによって、大人には大人のルールがあり、それは社会のルールであって、守らなければならないものなのだということが次第に理解してゆくようになる。こうやっていわば幼い自我の中に重要な超自我が形成されてゆくのである(5歳頃)。これをドルトは「自己を父親化する」*se paterniser*と言っている。(2)

子どもは親を批判するものであり、成長過程の一つにすぎない。6, 7歳で親を批判するのでは遅すぎるとさえドルトは言っている。こうした親への批判に対して親はどう振舞うべきか。子どもの批判には耳を傾けるべきだが、行動は改める必要はない。子どもを教育すべきで、子どもの機嫌を取るべきではない。

良い子は悪い子

いつも両親から気に入られたいと望んでいる子どもがいる。両親はいつも正しい、公正だと信じている子どもがいる。こういった子どもはやがて精神的には不健康になってゆく。愛憎という言葉があるが、愛情の裏には必ず憎しみがある。その逆もまた同じである。これは口唇期から肛門期にかけてのリビドー備給によって自我が構造化される際の、エディプスと去勢のコンプレックスを基盤にしている。それはともかく、愛情と緇い混ぜになった、あるいは愛情と交互に現われる敵意を子どもが示すことができれば、それに応じて子どもはますます精神的に健康になってゆく。親に気に入られようとする、子どものこの心の状態は、じつは乳児期にすでに存在しており、親の不安や心配に気を遣って、赤ん坊が泣くことを遠慮するということも、ドルトの症例ではよく見られる。まったく泣かずに親を安眠させることによって、赤ん坊は自己のリビドーを抑圧し、このようにして欲求や欲望を抑えることで、自己の中に膨大なエネルギーを蓄積し、やがてこれが思春期に爆発する。赤ん坊が、病的でない範囲で、泣き叫ぶことは、きわめて健全なことで、むしろ夜泣き一つしたことがない赤ん坊こそ、要注意である。

憎しみを親におつけることは健全なことだが、その精神分析的な意味はこうである—それらをおつけることによって、両親との関係が近親相姦的な、全面依存の絆から解放されるという意味である。カウンセリングを受けると、それまで良い子だったのが急に悪い子になって、親が面喰らうことがよくあるが、それはカウンセリングがうまくいっている証拠で、それまで抑圧していたリビドーが噴出したわけである。

子どもが自分なりに親に対する「そよそしさ」を持ち始めるのはよい兆しである。それは自分で責任を負おうとしている証しに他ならない。そのようなとき、親は子どもにどう言うべきか。突き放すのではなく、見守りながら、子どもを自立させ、親自身も子どもから自立する必要がある。ドルトは次のように言うべきだとアドバイスしている—「あなたが生まれるための準備をわたしはやってきて、あなたが生まれた。いまからは、生活上の困難なことは自分で切り抜けなさい。あなたを支えるためにわたしは何でもします。あなたが幸せになるためには、ね。でも、うまく行かなくても、あなたが幸せになれなくても、あなたが病気

になっても、それはわたしのせいとばかりは言えないのよ。あなたがおなかにいたとき、あなたは何も苦しまなかった。この世に生まれ出た今、人生はいつも思い通りになるとは限らないのよ。とにかく、物事をよい面から考えれば、きっと困難から抜け出せるでしょう。」(3)子どもの不幸について、親(特に母親)は自分のせいだと考えがちである。すべて自分のせいだと責任を一人背負い込みがちである。これは親自身の罪責感の表われである。この罪責感が子どもに引き継がれる。今度は子どもが自分を責めるようになる。罪責感のリレーが行われる。この悪循環をどこかで断ち切らなければならない。

ともかく、反発する子どもの批判や非難を支える—動揺せず、頭ごなしに否定せず—のは容易なことではない。なぜなら、親もまたその親に長い間服従してきて、その呪縛から解放されていないからである。

自律性と学業の遅れ

勉強が遅れるというのは、幼稚園からすでに現われることだが、これは別に母親のせいではない。子ども一人一人の特性である。口うるさく小言を言わなければすべてはうまくゆく。学業の遅れの責任は子どもに任せるべきである。ドルトが示したある家庭の症例報告がある。(4)それによると、一人で通園できる近い幼稚園ではなく、最高の教育を受けさせようとして、両親は子どもを一人で通うことができない遠い幼稚園へ入れた。その結果、毎朝子どもを遠くの幼稚園へ通わせるためにその家庭は大騒ぎをした。親は子どもに翻弄され、やがて子どもは幼稚園の生活に適応できなくなった。それで、ある日曜日、父親は決断した。子どもに道順を覚えさせようと、土曜・日曜ごとに訓練をした。やがて子どもは親を案内できるまでになった。そうすると子どもは一人で自信を持って乗り物に乗って通園できるようになり、幼稚園の生活にも適応できるようになった。それまでの子どもの駄々は母親を怒らせたがっていただけであった。一人で行きたくても行く方法を教わっていないで、その苦痛を母親に訴えていたわけである。母親に苦痛を示しながら、それをまた楽しんででもいたわけである。自分は家庭の中心人物で、両親の仕事が遅らせたり邪魔したりできる人物なのだ、と思い込んでいたのである。本心では、自律性を獲得して、安心感を得たいという欲求をもっていたのである。丸一日つぶして通園の練習をすることによって、その子は多くの困難を根本から断ち切る練習をしていたと言ってもよい。自律性の獲得は建設的な喜びである。両親を困らせたり不安がらせたりして感じる喜びは、邪な遊びである。これは家庭の構造が生み出したものである。

羨ける、ということを一言で言うならば、それは子

どもを自律的存在にする，ということである。教育はこの一言に集約されている。その際に，脅しや威嚇を使うと，両親と自己に対する信頼を損ねる。両親に対する不信とともに，自己に対する不信をも生み出す。これはトロマチスムの原因となる。またそれが父親と息子の関係で起こった場合（特に体罰を伴った場合），同性愛的関系に陥りやすい。父親と同性愛に陥るというより，のちに同性愛者になるという意味である。

ともかく，無意味な規則は押しつけない。安全に日常生活を送れるための枠組みだけをしっかりと教える。あとは自由にさせておく。それが，学齢に達していない幼い子どもの躰のポイントである。例えば，食事の後にデザートを食べるか，前に食べるかなどはどうでもよいことである。セーターやズボンを裏返し，前後ろに着たり履いたり，また靴の紐が結べないなどは，笑っておけばよい，いつか本人が困って，独力で解決するとドルトは言っている。子どもはどの子ども，同じように立派な能力をもって生きている。「これをやりなさい」「あれをやってはいけません」と絶えず命令されると，自律性（autonomie）を獲得することができなくなる。

ドルトが報告した症例では，就学時に知恵遅れとなった子どもがいるが，この子は生後五か月まで正常だった。ところが，自由な行動を阻害されて，いろんな経験が不足し，さらに心的交流が欠如したために，知恵遅れとなってしまった。一般に母親は子どもに対してよくこう言う—“急ぎなさい！”“早くしなさい！”急ぐこと，早くすることに意味があると親たちは思い込んでいるように思われる。確かにさまざまな理由があって，子どもたちを急がせているのかもしれないが，そのメリットとデメリットとを比べてみると，デメリットのほうがはるかに大きい。特別緊急の場合を除き，子どもが素早く行動すること，早く食べること，すぐ言うことを聞くこと，こういったことにはあまり意味がない。それらは単に親の喜びにすぎない。子どもの喜びはそうではない。一人で通園できた子どもの場合に見られるように，自分一人の力で行動することは，子どもにとって生きる自信となる。生きる自信ができれば生きる喜びとなる。母親が急がせようとして，自分で代わりにやってしまうと，こういった自信や喜びを子どもは獲得できない。子どもにとって何が本当に必要なことなのかを親は知らない。ドルトはそれを「親子関係の罫」と呼んでいる。子どものためによかれと思ってやっていることが，子どものためになっていないという意味である。

ドルトは特に（授乳期と離乳期を含めた）食事の躰と，排泄の躰を重要視する。中でも排泄は重要な精神医学的意味を持っている。このことを彼女は何度も繰り返して，機会を見ては強調している。下の躰の強要は精神医学的に大きなトロマチスムを生み出すと主張し

ている。この点については，別に稿を改めて報告したいと思う。早く大人になれるように，子どもの失敗には目をつむりなさい，とドルトはアドヴァイスしている。核家族化，地域疎外，都市化等々，子どもを囲む生活空間は子どもの自律性獲得にとって，日々多くの困難を伴うものとなっている。子どもの生活空間は日々自由に外部に向かって広がってゆくが，現在では社会で子どもを見守ってやる人がいなくなっている。子どもは自分の体験を通じて，自分に必要なものを知り，自分を脅かす危険を察知して身を守る術を知らなければならない。その体験ができにくくなっているのである。

2，3歳頃に子どもは自己を「母親化」*s'automaterner*し，6歳頃自己を「父親化」*s'autopaterner*する。つまり，幼稚園に入る以前（エディプス・コンプレックスが生じる男根期）に生活上の衣食住にかかわるものをある程度自分でできるようになり，小学校入学時（抑圧の潜伏期に入る）頃に社会的ルールを身に付け，身の危険から自分を守ることができるようになるというわけである。自己の「母親化」から自己の「父親化」へ至るためには父親の役目が非常に重要となってくる。このことについてはのちに述べるつもりである。「母親化」にしろ「父親化」にしろ，子どもの躰にとって，もっとも必要なことは親子間の完全な相互信頼である。子どもは親に信頼を寄せているが，親は子どもに信頼を寄せていない。そうなる子どもはやがて親に信頼を寄せなくなる。

親子間の完全な相互信頼というのは，じつは揺籃期にすでにはじまっているのである。赤ん坊は揺籃を手でつかんだり，自由に手足を動かしたりする。これが自律性の開始である。それと同時に親子の相互信頼の開始の時期でもある。赤ん坊のこの自由な運動を親が阻害した場合，赤ん坊は自己の運動を抑制し，やがて心理的にも表現を抑制するようになる。そうなる運動能力ばかりでなく他の精神的レベルの能力までもが低下してゆく。自由に動ける能力，他の子どもとの仲間遊び，よく食べる，おむつがとれる，よく眠る，そういったことは健全な親子関係があってはじめて可能となる。

では，健全な親子関係はどうすれば築けるのか。そのためには子どもが自律性を獲得することが必要である。自律性の獲得には次の三つの条件が要る—①明るい環境。家庭が笑い，会話，自由な行動にあふれていること。②言葉による説明。これは日本人がもっとも苦手としているところだが，大人の行為を子どもは驚くほどよく観察している。言葉によってこの行為を説明してやると，子どもの運動機能は優れて発達する。③失敗したときに叱らない。親子相互に信頼があり，愛や慰めに満ちた優しさがあれば，子どもは失敗を乗り越えることができる。親子関係が自分の支えとなっ

ているからである。

第三の人物

子どもはすべて自分の親から育てられたいと望んでいる。あまりにも当然すぎて親たちは意識の上にもものぼらないが、これはきわめて重要なことである。なぜなら、知性、情動両面において、自己を構造化するためには、両親の存在が必要だからである。両親と子どものこの三者間で思考や感情がめぐってゆく。このエディプス状況が構造化には必須のものである。親ひとり子ひとりでは互いが互いの鏡の反映となってしまう、相互依存の関係に陥り、同一化し、また同性愛化する。エディプスの三角形を作るためには「第三の人物」が必要不可欠である。この第三の人物とは、子どもにとって、父親または母親が選んだ人、父親（母親）から愛されている人である。子どもには自己形成のモデルとして、二人の人物が必要なのである。この「第三の人物」が人間ではなく、物である場合もある。ドルトの症例報告(5)では、こういう例がある。

離婚して親ひとり子ひとりの生活をしている母親は、家でチョッキの縫製をしていたが、自己の内部に閉じこもって、子どもとは話さず、一心不乱にミシンを動かすばかりだった。やがて子どもに異常行動が起き、腕をグルグル回したり、強迫的に同じ動作を繰り返したりして、精神病の一手手前であった。これは子どもが母親の部分対象と同一化したわけで、母親の「相手」（つまり「第三の人物」、ここではミシン）を模倣していたのである。腕をグルグル回していたのは、弾み車を模倣していたのである。このときの子どもの無意識の動きを言葉に表わすとすれば、こういうことになるだろう—《ママの心を一杯にしているこのミシンは、ママがとても好きなものなんだ。ママから愛されるためには、ママの心をボクのごとで一杯にするには、ボクはミシンのようにならなくちゃならないんだ。》この子は3歳で保育園に適應できなくなる。母子関係の精神療法を施された結果、症状は消えていった。危うく本当の精神病になるところだったとドルトは述懐している。

第三の人物がいない場合はどうするか。配偶者がいない場合である。これは孤立しやすい。狭い親子の二者間の鏡の世界に閉じこもりがちである。そういう場合、できるだけ他の同じ境遇の人たちと付き合うべきだとドルトは勧めている。そして、もっと大切なことは、なぜ片親なのかを子どもに話すべきだと言っている。離別、死別に関わりなく、その境遇に陥った理由を子どもに話して聞かせることが重要である。その際、そういった境遇をいまここにいない相手のせいにはいけない。子どもは親の言葉にある種の非難を感じ取ると、必ずその相手の罪責感を受け継ぐからである。

こうなったのは自分のせい、と思うのである。そのとき子どもに言うべき言葉は、相手がいたからあなたが生まれた、相手があなたに生をあたえたという言葉である。生みの親はただ一人しかいない。生物学的親は一人しか存在しない。このことを子どもに知らせる必要がある。たとえ子どもがそのときすでに他の大人たちに、例えば養父母のような社会的親や、恩師や指導者といった精神的親などに転移していても、である。

単身赴任、長期出張、遅い帰宅などで、たとえ身体的に不在であっても、子どものこの最初の指向対象（référent）が象徴的に存在しつづければ、子どもの心理的構造化は可能となる。例えば父親が座る食卓の席には子どもは座らない、父親が寝るベッドには子どもはもぐりこまない、といったルールが守られさえすれば、父親は子どものなかで象徴的に存在しつづける。

母子家庭に話を戻すと、これはドルトの主張の特徴だが、子どもにはすべてを言いなさい、すべて本当のことを言いなさい、例えその子どもが赤ん坊であっても、ということに尽きる。子どもは赤ん坊であっても、ラカンのいう「言存在」（parlêtre）である以上、自分の現実や心理に関わるものであれば、大人の言葉を理解できるとドルトは考えている。言語学や発達心理学の分野では否定されるだろうが、精神分析においてはこれは多くの症例において証明されている事実である。ともかく、いまそこにいない「第三の人物」をまるではじめからいなかったかのごとく隠蔽し続けることは、子どもの成長にとって大きな害を及ぼす。子どもは象徴的構造において、一種の半身不随者のようになる。

二つあるべき鏡が一つしかない状況は、危険な二者関係に陥りやすい。自分の生のすべてを相手に委ねるようになるからである。不在の相手のことを語るのに早すぎるということは決してない。写真を見せたりしながら象徴的に存在させることが重要である。すでに述べたように、その子どもが赤ん坊であっても、である。言わないより、知って苦しむほうがまだよい。作り話より真実のほうが大事である。親が言わなくともやがて、子どもは自分の過去を知っている他の大人たちからいろいろと聞き出すだろう。そうやって自分の生のはじまりを知るのである。自己の起源を知ることがきわめて重要なことである。これは早ければ早いほどよい。自分は突然この世に誕生したわけではない。無から生じたわけではない。二人の親から生まれたのである。いまここにいないもう一方の親の存在を、子どもの心に定着させるために、本当のことを言うべきである。残念ながら日本では真実を言わない傾向にある。子どものことを思っていることだが、これがむしろ子どもの健全な心の発達にとって、障害となる。また裁判でも実の親に会わせない判決が出る傾向にあるが、これも同じ理由から有害だと言える。

注

- (1) Françoise Dolto (1908-1988) パリ生れ。R. ラフォ
ルグの教育分析をうけた後、精神分析医となる。や
がてパリ・サン＝タンヌ病院でJ. ラカンと出会い、
これが彼女の人生の決定的な転機となる。特に小児
の精神分析においては天才的な手腕を発揮した。彼
女は「技法」を重視し、幅広い臨床経験を通して彼
女独自の治療法を作り上げていった。残念ながら現
在の日本ではほとんどまともに紹介されたことがな
い。邦訳書としては『子供が登場するとき』(村上
光彦, 高山晶, 宮崎康子訳, みすず書房), 『少年ド
ミニクの場合』(小此木啓吾, 中野久夫訳, 平凡社),
『子どもの無意識』(小川豊昭, 山中哲夫, 青土社)
などがある。
- (2) Françoise Dolto, *Les étapes majeures de l'en-*
fance, Gallimard, 1994, p.12.
- (3) *Ibid.*, p.9.
- (4) *id.*, pp.9-10.
- (5) *id.*, pp.12-13.